ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	近藤　譲

主な担当科目	楽式論Ⅰ,楽式論Ⅱ,西洋音楽史研究Ⅳ,作曲実技,博士外国語原典研究特講Ⅰ
シラバス	次ページをご参照ください

2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	博士学位論文及び修士学位論文の指導、及び、博士後期課程における作曲実技の指導を適切に行い、講義においては、音楽史・音楽理論・美学・語学の諸分野に亙る総合的な知識を学生に持たせることを目標とした。
2022年の教育に関する自己評価	論文指導、作曲実技指導そして講義において、目的を達成し得たと考えている。

2022年のFD活動に関する自己評価	FD研修会に出席したが、それ以外の活動は積極的には行わなかった。
授業改善のために取り入れた研修内容	特になし

科目名－クラス名

楽式論Ⅰ　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽における様々な基本的な形式とその原理を、歴史的な背景とともに理解する。この授業では、単に「ソナタ形式」や「三部形式」といったような形式パターンの説明ではなく、音楽史上の各時代の音楽精神の結晶としての形式を理解することを通じて、各時代に「音楽」がどのようなものとして受け取られていたかを理解することを目的とする。具体的には、協奏曲、交響曲(ソナタ)、変奏曲、標題音楽といった主題を中心に、講義が行われる。

学修成果

音楽において形式というものが持っている重要な意味を知ることによって、音楽そのものに対する理解が深まり、演奏でも鑑賞でも、自分の力を高めることができる。また、いろいろな形式の歴史的な背景を学ぶので、西洋音楽の歴史の流れについてもよりよく理解できるようになる。

授業展開と内容

第1回	音楽の形式とは何か?
第2回	「協奏曲」の形式と歴史について
第3回	「協奏曲」の形式と歴史について
第4回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第5回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第6回	「変奏曲」の形式と歴史について
第7回	「変奏曲」の形式と歴史について
第8回	「標題音楽」の形式と歴史について
第9回	「標題音楽」の形式と歴史について
第10回	「形式のはっきりしない音楽」の形式と歴史について
第11回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第12回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第13回	「グレゴリオ聖歌」の形式と歴史について
第14回	20世紀の音楽語法と形式について
第15回	20世紀の音楽語法と形式について
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

西洋の音楽史の流れについての知識(大まかな知識でよいのですが)、そして、和声学の基礎的な知識があると授業が理解しやすいでしょう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

復習として、授業で具体的に挙がった曲を、自分で積極的に楽譜を見ながら、少なくとも1時間程度は時間をかけて鑑賞するように心がけてください。

教科書・参考書

教科書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）

科目名－クラス名

楽式論Ⅰ　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽における様々な基本的な形式とその原理を、歴史的な背景とともに理解する。この授業では、単に「ソナタ形式」や「三部形式」といったような形式パターンの説明ではなく、音楽史上の各時代の音楽精神の結晶としての形式を理解することを通じて、各時代に「音楽」がどのようなものとして受け取られていたかを理解することを目的とする。具体的には、協奏曲、交響曲(ソナタ)、変奏曲、標題音楽といった主題を中心に、講義が行われる。

学修成果

音楽において形式というものが持っている重要な意味を知ることによって、音楽そのものに対する理解が深まり、演奏でも鑑賞でも、自分の力を高めることができる。また、いろいろな形式の歴史的な背景を学ぶので、西洋音楽の歴史の流れについてもよりよく理解できるようになる。

授業展開と内容

第1回	音楽の形式とは何か?
第2回	「協奏曲」の形式と歴史について
第3回	「協奏曲」の形式と歴史について
第4回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第5回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第6回	「変奏曲」の形式と歴史について
第7回	「変奏曲」の形式と歴史について
第8回	「標題音楽」の形式と歴史について
第9回	「標題音楽」の形式と歴史について
第10回	「形式のはっきりしない音楽」の形式と歴史について
第11回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第12回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第13回	「グレゴリオ聖歌」の形式と歴史について
第14回	20世紀の音楽語法と形式について
第15回	20世紀の音楽語法と形式について
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

西洋の音楽史の流れについての知識(大まかな知識でよいのですが)、そして、和声学の基礎的な知識があると授業が理解しやすいでしょう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

復習として、授業で具体的に挙がった曲を、自分で積極的に楽譜を見ながら、少なくとも1時間程度は時間をかけて鑑賞するように心がけてください。

教科書・参考書

教科書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）

科目名－クラス名

楽式論 II　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽の形式構造について、実際の様々な作品の分析を通じて、理解を深める。

学修成果

音楽における形式構造の重要性を、実際の作品を通じて知ることによって、演奏解釈や音楽鑑賞の力を高めることができる。また、作品を分析をすることによって、読譜力が養われる。

授業展開と内容

第1回	曲の形式構造の見方について
第2回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第3回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第4回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第5回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第6回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第7回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第8回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第9回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第10回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第11回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第12回	ブラームス:弦楽四重奏曲第2番 第2楽章の形式構造について
第13回	形式構造のもう一つの見方について――ショパンの練習曲「革命」を例に
第14回	ルネサンス音楽の形式構造について――デュファイのモテットを例に
第15回	バロック音楽の調性と和声について――マリーニのヴァイオリン・ソナタを例に
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

この授業の内容をよく理解するためには、楽式論Ｉ－Ａを履修しておくことが望ましい。また、楽典と和声学、そして音楽史の基礎知識を持っていることが望ましい。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、授業で取り上げる作品を予め聴いておくこと。復習として、授業で取り上げた作品、及び同じ楽器編成による同じ作曲家の作品や同時代の作品を、楽譜

を見ながら分析的な観点から注意深く聴き直してみること。予習と復習を合わせて、1時間程度の自習をするように努めること。

教科書・参考書

参考書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）、及び、「楽典」に関する書物(どんなものでもかまいません)

科目名－クラス名

楽式論 II　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽の形式構造について、実際の様々な作品の分析を通じて、理解を深める。

学修成果

音楽における形式構造の重要性を、実際の作品を通じて知ることによって、演奏解釈や音楽鑑賞の力を高めることができる。また、作品を分析をすることによって、読譜力が養われる。

授業展開と内容

第1回	曲の形式構造の見方について
第2回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第3回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第4回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第5回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第6回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第7回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第8回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第9回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第10回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第11回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第12回	ブラームス:弦楽四重奏曲第2番 第2楽章の形式構造について
第13回	形式構造のもう一つの見方について――ショパンの練習曲「革命」を例に
第14回	ルネサンス音楽の形式構造について――デュファイのモテットを例に
第15回	バロック音楽の調性と和声について――マリーニのヴァイオリン・ソナタを例に
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

この授業の内容をよく理解するためには、楽式論Ｉ－Ａを履修しておくことが望ましい。また、楽典と和声学、そして音楽史の基礎知識を持っていることが望ましい。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、授業で取り上げる作品を予め聴いておくこと。復習として、授業で取り上げた作品、及び同じ楽器編成による同じ作曲家の作品や同時代の作品を、楽譜

を見ながら分析的な観点から注意深く聴き直してみること。予習と復習を合わせて、1時間程度の自習をするように努めること。

教科書・参考書

参考書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）、及び、「楽典」に関する書物(どんなものでもかまいません)

科目名－クラス名

西洋音楽史研究Ⅳ

曜日時限

木 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

複雑な様相をみせる20世紀の音楽について、さまざまな作曲家それぞれの作品を見ることによって、その音楽語法と思想について学ぶ。前期は、20世紀の音楽史を概観し、後期は、各作曲家の具体的な作品を分析的に学ぶ。

学修成果

現代の作曲家たちの創作の基盤となっている20世紀の音楽につて学ぶことにより、私たちの時代の芸術音楽への理解を(演奏においても、鑑賞においても)深めることができる。また、現代の音楽と過去の伝統とのつながりを理解することができる。

授業展開と内容

第1回	20世紀初頭の音楽の状況
第2回	音楽様式の変化の背後にある思想
第3回	ドビュッシーの音楽と印象主義
第4回	シェーンベルクの音楽と表現主義
第5回	12音技法の音楽
第6回	ストラヴィンスキーの音楽と新古典主義
第7回	新古典主義
第8回	メシアンの音楽との旋法理論
第9回	総セリー音楽
第10回	音群音楽
第11回	20世紀前半のアメリカの音楽
第12回	ケージの音楽とアメリカの実験主義
第13回	実験主義以後
第14回	前衛主義の終焉とポスト・モダニズム
第15回	日本の現代音楽
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

特になし

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

復習として、授業で学んだ作曲家の作品を自分で積極的に聴いてみることを心掛けてほしい。

教科書・参考書

参考書:近藤譲『ものがたり西洋音楽史』(岩波書店「岩波ジュニア新書」)、柴田南雄『西洋音楽史4　印象派以後』(音楽之友社)、ポール・グリフィス『現代音楽小史ーードビュッシーからブーレーズまで』(音楽之友社)

科目名－クラス名

博士外国語原典研究特講Ⅰ

曜日時限

火 4時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

英語文献を読み、主に博士論文の執筆に必要な情報・知識を得ることを目的とする。本講Ⅱでは、事典項目、台本や歌詞、楽譜の序文やインストラクション、作曲家や演奏家の評伝、音楽評論、楽曲分析や作品論を教材として、様々なタイプの異なる外国語文献を読みこなす訓練を積んでいく。

学修成果

様々なタイプの外国語文献を読みこなす能力を身に付けることができる。またそのことを通して、自らの知識や思考、音楽的経験を体系化していくことができるようになる。

授業展開と内容

第1回	導入：英語文献を読むことの意味
第2回	事典項目の講読①‥単語および重要事項の確認
第3回	事典項目の講読②‥訳文を作成する
第4回	台本（あるいは歌詞）の講読①‥単語および重要事項の確認
第5回	台本（あるいは歌詞）の講読②‥訳文を作成する
第6回	台本（あるいは歌詞）の講読③‥訳文を精査する
第7回	楽譜の序文やインストラクションの講読①‥単語および重要事項の確認
第8回	楽譜の序文やインストラクションの講読②‥訳文を作成する
第9回	作曲家や演奏家の評伝の講読①‥単語および重要事項の確認
第10回	作曲家や演奏家の評伝の講読②‥訳文を作成する
第11回	音楽評論の講読
第12回	楽曲分析や作品論の講読①‥単語および重要事項の確認
第13回	楽曲分析や作品論の講読②‥訳文を作成する
第14回	楽曲分析や作品論の講読③‥訳文を精査する
第15回	総括
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

英語文献の講読には、単に単語の意味や文法を知っているというだけでは不十分である。一語一語、そこで語られていることの背景を理解し、新たに得られた知識が、音楽史的・研究史的にどのような意味を持つのか、常に問いかけながら読んで欲しい。根気強く、予習・復習を丁寧に繰り返すこと。
取り上げるテクストとして、受講生自身が研究・論文執筆のために必要とする参考文献を読むこともできる。受講生の興味や必要に応じてテクストを選定する。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

講読能力の向上は、その言語を聞き、話し、書く能力の向上と直結している。このことを肝に銘じて、日常においても常に外国語に触れる生活を心掛けること。

教科書・参考書

その都度配付、または指示する。

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2806　教員名：近藤　譲

1）評価結果に対する所見

概ね良好な評価を得て、授業目標を達成できていると感じている。

2）要望への対応・改善方策

特になし。

3）今後の課題

特になし。

以　上

科目名－クラス名

楽式論Ⅰ　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽における様々な基本的な形式とその原理を、歴史的な背景とともに理解する。この授業では、単に「ソナタ形式」や「三部形式」といったような形式パターンの説明ではなく、音楽史上の各時代の音楽精神の結晶としての形式を理解することを通じて、各時代に「音楽」がどのようなものとして受け取られていたかを理解することを目的とする。具体的には、協奏曲、交響曲(ソナタ)、変奏曲、標題音楽といった主題を中心に、講義が行われる。

学修成果

音楽において形式というものが持っている重要な意味を知ることによって、音楽そのものに対する理解が深まり、演奏でも鑑賞でも、自分の力を高めることができる。また、いろいろな形式の歴史的な背景を学ぶので、西洋音楽の歴史の流れについてもよりよく理解できるようになる。

授業展開と内容

第1回	音楽の形式とは何か?
第2回	「協奏曲」の形式と歴史について
第3回	「協奏曲」の形式と歴史について
第4回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第5回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第6回	「変奏曲」の形式と歴史について
第7回	「変奏曲」の形式と歴史について
第8回	「標題音楽」の形式と歴史について
第9回	「標題音楽」の形式と歴史について
第10回	「形式のはっきりしない音楽」の形式と歴史について
第11回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第12回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第13回	「グレゴリオ聖歌」の形式と歴史について
第14回	20世紀の音楽語法と形式について
第15回	20世紀の音楽語法と形式について
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

西洋の音楽史の流れについての知識(大まかな知識でよいのですが)、そして、和声学の基礎的な知識があると授業が理解しやすいでしょう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

復習として、授業で具体的に挙がった曲を、自分で積極的に楽譜を見ながら、少なくとも1時間程度は時間をかけて鑑賞するように心がけてください。

教科書・参考書

教科書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）

科目名－クラス名

楽式論 II　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽の形式構造について、実際の様々な作品の分析を通じて、理解を深める。

学修成果

音楽における形式構造の重要性を、実際の作品を通じて知ることによって、演奏解釈や音楽鑑賞の力を高めることができる。また、作品を分析をすることによって、読譜力が養われる。

授業展開と内容

第1回	曲の形式構造の見方について
第2回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第3回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第4回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第5回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第6回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第7回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第8回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第9回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第10回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第11回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第12回	ブラームス:弦楽四重奏曲第2番 第2楽章の形式構造について
第13回	形式構造のもう一つの見方について――ショパンの練習曲「革命」を例に
第14回	ルネサンス音楽の形式構造について――デュファイのモテットを例に
第15回	バロック音楽の調性と和声について――マリーニのヴァイオリン・ソナタを例に
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

この授業の内容をよく理解するためには、楽式論Ｉ－Ａを履修しておくことが望ましい。また、楽典と和声学、そして音楽史の基礎知識を持っていることが望ましい。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、授業で取り上げる作品を予め聴いておくこと。復習として、授業で取り上げた作品、及び同じ楽器編成による同じ作曲家の作品や同時代の作品を、楽譜

を見ながら分析的な観点から注意深く聴き直してみること。予習と復習を合わせて、1時間程度の自習をするように努めること。

教科書・参考書

参考書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）、及び、「楽典」に関する書物(どんなものでもかまいません)

科目名－クラス名

楽式論Ⅰ　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

西洋音楽における様々な基本的な形式とその原理を、歴史的な背景とともに理解する。この授業では、単に「ソナタ形式」や「三部形式」といったような形式パターンの説明ではなく、音楽史上の各時代の音楽精神の結晶としての形式を理解することを通じて、各時代に「音楽」がどのようなものとして受け取られていたかを理解することを目的とする。具体的には、協奏曲、交響曲(ソナタ)、変奏曲、標題音楽といった主題を中心に、講義が行われる。

学修成果

音楽において形式というものが持っている重要な意味を知ることによって、音楽そのものに対する理解が深まり、演奏でも鑑賞でも、自分の力を高めることができる。また、いろいろな形式の歴史的な背景を学ぶので、西洋音楽の歴史の流れについてもよりよく理解できるようになる。

授業展開と内容

第1回	音楽の形式とは何か?
第2回	「協奏曲」の形式と歴史について
第3回	「協奏曲」の形式と歴史について
第4回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第5回	「交響曲」と「ソナタ」の形式と歴史について
第6回	「変奏曲」の形式と歴史について
第7回	「変奏曲」の形式と歴史について
第8回	「標題音楽」の形式と歴史について
第9回	「標題音楽」の形式と歴史について
第10回	「形式のはっきりしない音楽」の形式と歴史について
第11回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第12回	「カノン」と「フーガ」の形式と歴史について
第13回	「グレゴリオ聖歌」の形式と歴史について
第14回	20世紀の音楽語法と形式について
第15回	20世紀の音楽語法と形式について
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

西洋の音楽史の流れについての知識(大まかな知識でよいのですが)、そして、和声学の基礎的な知識があると授業が理解しやすいでしょう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

復習として、授業で具体的に挙がった曲を、自分で積極的に楽譜を見ながら、少なくとも1時間程度は時間をかけて鑑賞するように心がけてください。

教科書・参考書

教科書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）

科目名－クラス名

楽式論 II　A

曜日時限

月 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽の形式構造について、実際の様々な作品の分析を通じて、理解を深める。

学修成果

音楽における形式構造の重要性を、実際の作品を通じて知ることによって、演奏解釈や音楽鑑賞の力を高めることができる。また、作品を分析をすることによって、読譜力が養われる。

授業展開と内容

第1回	曲の形式構造の見方について
第2回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第3回	シューマン:《子供の情景》の中のいくつかの曲の形式構造について
第4回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第5回	モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第40番 K.454 第1楽章の形式構造について
第6回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第7回	ベートーヴェン: 交響曲第1番 第1楽章の形式構造について
第8回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第9回	ベルリオーズ:《幻想交響曲》第4楽章の形式構造について
第10回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第11回	シューベルトのいくつかの歌曲の形式構造について
第12回	ブラームス:弦楽四重奏曲第2番 第2楽章の形式構造について
第13回	形式構造のもう一つの見方について――ショパンの練習曲「革命」を例に
第14回	ルネサンス音楽の形式構造について――デュファイのモテットを例に
第15回	バロック音楽の調性と和声について――マリーニのヴァイオリン・ソナタを例に
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

この授業の内容をよく理解するためには、楽式論Ｉ－Ａを履修しておくことが望ましい。また、楽典と和声学、そして音楽史の基礎知識を持っていることが望ましい。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

予習として、授業で取り上げる作品を予め聴いておくこと。復習として、授業で取り上げた作品、及び同じ楽器編成による同じ作曲家の作品や同時代の作品を、楽譜

を見ながら分析的な観点から注意深く聴き直してみること。予習と復習を合わせて、1時間程度の自習をするように努めること。

教科書・参考書

参考書：近藤譲『ものがたり西洋音楽史』（岩波書店 [岩波ジュニア新書]）、及び、「楽典」に関する書物(どんなものでもかまいません)

科目名－クラス名

課題研究Ⅰ

曜日時限

火 2時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第29回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認
第30回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認

履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

課題研究Ⅰ

曜日時限

火 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第29回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認
第30回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認

履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

課題研究Ⅰ

曜日時限

木 2時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

◆修士課程における学修の総括として、修士論文（20,000～30,000字程度）を執筆する。
◆修士論文では、音楽実技の実践者としての身近な経験や問題意識に基づいて、先行研究を正しく評価・参照しながら、楽曲分析・演奏解釈・調査に基づくデータの収集と分析などの方法により学術的な議論を深め、展開していくことが求められる。したがって、それに耐えうるテーマ・題材を設定することが必要である。
◆この授業では、担当教員の個別指導を受けて、学術論文の基本的な書き方、および論文作成に必要なリサーチ・スキルを修得するこ

学修成果

論文執筆の過程を通じて、学術論文の執筆に必要な基本的なリサーチ・スキルおよび文章力を身につけることができる。
論文執筆や口頭試問はまた、言語を用いて他人に自分の考えを効果的に伝える訓練でもあり、プレゼンテーション・スキルを身につけることができる。

授業展開と内容

第1回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定①　修士論文題目の提出に向けた指導

第2回　執筆計画の策定と論文タイトルの決定②　修士論文執筆計画書の提出に向けた指導

第3回　論文執筆の予備的作業①　文献表の完成と基礎知識の整理

第4回　論文執筆の予備的作業②　文献・資料の選定

第5回　論文執筆の予備的作業③　論文の構想を練り、章立てを作る／研究倫理審査の要・不要の確認
★「履修上の注意」を参照のこと

第6回　論文執筆①　序論の書き方

第7回　論文執筆②　序論の執筆

第8回　（以下、３章立ての論文を例に、執筆計画に沿った授業計画を記す。４章立ての場合もこれに準じて計画する）
論文執筆③　第１章のための文献を読む

第9回　論文執筆④　第１章の執筆

第10回　論文執筆⑤　第１章の推敲

第11回　論文執筆⑥　第２章のための文献を読む

第12回　論文執筆⑦　第２章の執筆

第13回　論文執筆⑧　第２章の推敲

第14回　中間発表の準備①　中間発表にむけて、発表原稿作成

第15回　１．中間発表の準備②　中間発表のハンドアウト作成、プレゼンテーションの練習２．夏休み中の作業計画確認
★修士論文中間レポートを指導担当の教員に提出（字数自由。期日・様式は各担当教員の指示に従うこと）

第16回　中間発表のレビュー／執筆進捗状況の報告／後期の執筆計画の確認

第17回　論文執筆⑨　第３章のための文献や資料を整理する

第18回　論文執筆⑩　第３章の執筆

第19回　論文執筆⑪　第３章の推敲

第20回　論文執筆⑫　その他の部分の執筆と推敲

第21回　論文執筆⑬　結論の書き方

第22回　論文執筆⑭　結論の執筆と推敲

第23回　論文執筆⑮　序論と結論、および全体の論旨の確認と見直し

第24回　論文執筆⑯　参考文献表を整える

第25回　論文執筆⑰　書式を整える（注の書式、参考文献表の書式、譜例や図版のキャプション等の確認）

第26回　論文執筆⑱　体裁を整える（本文表紙、凡例、目次、本文、参考文献表、添付資料、謝辞等、全体の確認）

第27回　論文執筆⑲　論文要旨を執筆する

第28回　提出前の最終確認　論文、要旨、データ等の提出物について、様式と部数を確認
★必ず指導担当の教員の最終チェックを受け、題目変更等の添付書類にサインを貰う

第29回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　口頭試問で指摘を受けた事項の確認、および誤字脱字・書式の確認
第30回	口頭試問後、修士論文最終提出に向けた作業①　本文と要旨およびその他提出物の再確認

履修上の注意

◆原則として、1年次必修の「音楽研究法基礎」の単位を取得していることを履修の条件とする。
◆随時実施される「修士論文・修士研究ガイダンス」に必ず出席し、履修上の注意事項の詳細を確認すること。
◆修士論文（課題研究Ⅰ）、修士研究（課題研究Ⅱ・Ⅲ）のいずれを選択するかは学生自身が決定できるが、事前の面談等で教員とよく相談し、その助言を参考にすること。
◆修士論文を執筆する年度当初に「修士論文執筆計画書」の提出、「修士論文題目（和文・英文）」の提出が必須となる。
◆論文の執筆に当たっては研究倫理に留意し

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

◆基本的に論文の執筆そのものが「授業外学修」である。授業内で充実した指導を受けるためには、各自の自発的な学修が必須であり、授業業外の執筆時間を日常的に十分確保できるか否かが、結果に直結する。スケジュール管理を徹底して行い、執筆時間（毎週少なくとも60分、基本的にそれ以上）を確実に確保すること。
◆そのほか、以下を履修に際して必須の授業外学修として位置付ける。
①前年度中に行われる、テーマ決定のための個別面談
②「研究倫理ガイダンス」への参加
③口頭試問で指摘を受けた事項の修正・確認（試問終了後、担

教科書・参考書

ガイダンスで配付した論文作成マニュアルのほか、各自の研究内容に応じて必要な文献等を指示する。執筆に必要な主要文献については各自が手配し入手すること。また、以下の参考書も参照すること。①市古みどり ほか著『資料検索入門――レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会刊、②大出敦 著『クリティカル・リーディング入門――人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会刊、③久保田慶一著『音楽の文章セミナー――プログラム・ノートから論文まで』（改訂版）音楽之友社刊、④R. J. ウィンジェル著『音楽の文章術 論文

科目名－クラス名

西洋音楽史研究Ⅳ

曜日時限

木 3時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

複雑な様相をみせる20世紀の音楽について、さまざまな作曲家それぞれの作品を見ることによって、その音楽語法と思想について学ぶ。前期は、20世紀の音楽史を概観し、後期は、各作曲家の具体的な作品を分析的に学ぶ。

学修成果

現代の作曲家たちの創作の基盤となっている20世紀の音楽につて学ぶことにより、私たちの時代の芸術音楽への理解を(演奏においても、鑑賞においても)深めることができる。また、現代の音楽と過去の伝統とのつながりを理解することができる。

授業展開と内容

第1回	20世紀初頭の音楽の状況
第2回	音楽様式の変化の背後にある思想
第3回	ドビュッシーの音楽と印象主義
第4回	シェーンベルクの音楽と表現主義
第5回	12音技法の音楽
第6回	ストラヴィンスキーの音楽と新古典主義
第7回	新古典主義
第8回	メシアンの音楽との旋法理論
第9回	総セリー音楽
第10回	音群音楽
第11回	20世紀前半のアメリカの音楽
第12回	ケージの音楽とアメリカの実験主義
第13回	実験主義以後
第14回	前衛主義の終焉とポスト・モダニズム
第15回	日本の現代音楽
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

特になし

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

復習として、授業で学んだ作曲家の作品を自分で積極的に聴いてみることを心掛けてほしい。

教科書・参考書

参考書:近藤譲『ものがたり西洋音楽史』(岩波書店「岩波ジュニア新書」)、柴田南雄『西洋音楽史4　印象派以後』(音楽之友社)、ポール・グリフィス『現代音楽小史ーードビュッシーからブーレーズまで』(音楽之友社)

科目名－クラス名

博士外国語原典研究特講Ⅰ

曜日時限

火 4時限

担当教員

近藤　譲

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

英語文献を読み、主に博士論文の執筆に必要な情報・知識を得ることを目的とする。本講Ⅱでは、事典項目、台本や歌詞、楽譜の序文やインストラクション、作曲家や演奏家の評伝、音楽評論、楽曲分析や作品論を教材として、様々なタイプの異なる外国語文献を読みこなす訓練を積んでいく。

学修成果

様々なタイプの外国語文献を読みこなす能力を身に付けることができる。またそのことを通して、自らの知識や思考、音楽的経験を体系化していくことができるようになる。

授業展開と内容

第1回	導入：英語文献を読むことの意味
第2回	事典項目の講読①‥単語および重要事項の確認
第3回	事典項目の講読②‥訳文を作成する
第4回	台本（あるいは歌詞）の講読①‥単語および重要事項の確認
第5回	台本（あるいは歌詞）の講読②‥訳文を作成する
第6回	台本（あるいは歌詞）の講読③‥訳文を精査する
第7回	楽譜の序文やインストラクションの講読①‥単語および重要事項の確認
第8回	楽譜の序文やインストラクションの講読②‥訳文を作成する
第9回	作曲家や演奏家の評伝の講読①‥単語および重要事項の確認
第10回	作曲家や演奏家の評伝の講読②‥訳文を作成する
第11回	音楽評論の講読
第12回	楽曲分析や作品論の講読①‥単語および重要事項の確認
第13回	楽曲分析や作品論の講読②‥訳文を作成する
第14回	楽曲分析や作品論の講読③‥訳文を精査する
第15回	総括
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

英語文献の講読には、単に単語の意味や文法を知っているというだけでは不十分である。一語一語、そこで語られていることの背景を理解し、新たに得られた知識が、音楽史的・研究史的にどのような意味を持つのか、常に問いかけながら読んで欲しい。根気強く、予習・復習を丁寧に繰り返すこと。
取り上げるテクストとして、受講生自身が研究・論文執筆のために必要とする参考文献を読むこともできる。受講生の興味や必要に応じてテクストを選定する。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

講読能力の向上は、その言語を聞き、話し、書く能力の向上と直結している。このことを肝に銘じて、日常においても常に外国語に触れる生活を心掛けること。

教科書・参考書

その都度配付、または指示する。

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2806　教員名：近藤　譲

1）評価結果に対する所見

概ね良好な評価を得て、授業目標を達成できていると感じている。

2）要望への対応・改善方策

特になし。

3）今後の課題

特になし。

以　上